



「喜んでもらえるのがうれしい」と獣医師の水谷涉さん（右）

るうちに触れ合いを希望するようになったお年寄りもいるという。

CAPPは、公益社団法人「日本動物病院協会」（JAHA、本部東京）による、動物を連れて福祉施設や病院、学校などを訪問する活動だ。動物の持つ温もりや優しさに触れてもらい、お年寄りや児童らのリハビリテーションや思いやりの心の育成のサポートなどをする。

獣医師らで作る団体が、動物が持つ不思議な力に着目したのだ。

JAHAがCAPPを始めたのは1986年。訪問実績は計1万5194回。参加した獣医師は2万3407人、ボランティアは11万9453人に上る（2013年9月現在、いずれも延べ数）。

趣旨に賛同して十分な説明を受けたボランティアが、自分の飼っているペットとともに施設などを訪問する。ただ、どんなペットで

もよいわけではない。人に好まれる、むやみにほえない、健康管理ができていかなどといった条件がある。犬や猫が大半だが、ウサギやモルモットなどの場合もある。

普段は見られない笑顔や振る舞いも

藤沢市のボランティアの尾形ナカ子さん（81）は、愛犬（シーズー）のケンタくん（10歳、雄）を連れて施設内を回る。ウエスタンハットを頭に乗せたケンタくんは尾形さんに従順だ。「皆さんの役に立っているのがうれしい」と、尾形さんは5年ほど活動を続けている。CAPPは尾形さん自身の心と体の健康にも役立つている。

尾形さんは11年前に夫と死別して現在一人暮らし。ケンタくんが心の拠りどころになっている。ひきこもりがちにならずにすんでいるのはケンタくんのおかげという。

獣医師の水谷さんは「お年寄りが笑った、しゃべった、と驚く職員の声が励みになる」と、ラポール藤沢で20年ほどCAPPを続けている。数多くの動物たちの活躍を目にできた。これまでに

かみつき事故や感染症などは起きていないという。

ラポール藤沢は現在、毎月1回、平日の午後の30分ほどをCAPPに充てている。回数や時間は限られているが、お年寄りへの良い影響はつきり分かる、という。不自由な手で動物をなでようとする。ほとんど表情のなかった人が目尻を下げる。飼っていたペットの思い出を話し始める――そのような「変化」があつたという。

動物との交流は「見つめ合う」「なでる」などの非言語のコミュニケーションが中心となる。認知症の人は、良好な対人関係を築くのが難しい。だからこそ、動物の出番となるのだろう。

施設長の片山さんは「お年寄りは、犬や猫などがいると、介護職員だけのときより、リラックスしているようだ」と言う。

しつけの行き届いた動物は、お年寄りに身を任せている。ぴったりとそばに寄り添い、うれしそうにしつぽを振ることもある。

「認知症の人は、家族や医療・介護者から『世話をされる』立場です。けれども、それは自尊心を傷つけるかもしれない。体をさする

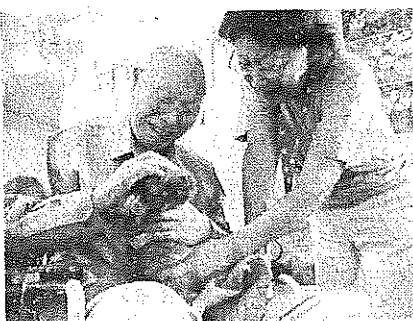
など動物に触れ合うことで、彼らは『役に立てる』と自信を取り戻し、さらに『私がないといけない』と思うようになるのではないでしようか」（片山さん）

薬物治療などに頼りすぎずに人間が元来有する回復力を高める、というのがこの施設の基本理念。片山さんは「動物と接したときの笑顔や振る舞いは、普段見られないものです」と言う。

「動物との触れ合いによるリラックスマ効果や刺激が、そのような効果をもたらすのでしよう」

そう話すのは、麻布大学獣医学部の太田光明教授だ。人間の健康状態に対して動物が及ぼす効果などを研究している。

ただ、太田教授は「認知症そのものが良くなったというわけではないだろう」と言う。認知症の人



「かわいいなあ」と犬の頭をなでてっこり